

実践英語教育の現状について

2007年度宿泊セミナー報告から

基礎教育センター・教授
加藤 光也

1. はじめに

ここでは平成19年5月5日31日に開かれた八王子宿泊セミナーでの発表に補足を加えながら、2年間の実践英語教育プログラムの現状と課題について報告する。(資料については前回の第4回FDセミナーの報告と重複する部分が多いことをお断りする。)

平成17年4月からの2年間の実践英語プログラムの実践は、十分な準備期間がなかったことを考えれば、これまでのところ、まずまずの成果を上げているように思われるが、以下、現在の英語教育プログラムの内容を確認し、アンケート結果に表れたこれまでの課題と改善点についてまとめることにする。

2. 授業配置と内容

まず、2年間の実践英語教育プログラムにおける授業配置とその内容を再度、確認しておきたい。

1年次 78クラス+再履修6クラス

Iab (日本人授業、統一)	Icd (NSE 授業、統一)
Reading, Listening 統一テキスト、統一試験	Oral Communication (Role-Play, Presentation) 統一 テキスト、統一試験

2年次 65クラス+再履修1クラス

IIab (日本人授業、選択)	IIcd (NSE 授業、統一)
三つのメニュー (Media, Reading, Comprehensive) から選択	Oral Communication (Role-Play, Debate) 統一テキスト、統一試験

* 2年次のクラス数が少ないのは、健康福祉学部では1年次の実践英語Ⅰだけが必修であり、2年次には荒川キャンパスで医療英語を学ぶためである。

また、平成18年度の教員配置は以下のようになっていた。

日本人専任 22 人	日本人非常勤 42 人
------------	-------------

Berlitz 講師 22 人

* 日本人担当授業で専任教員が担当しているのは三分の一以下であり、今後、再履修クラスの増加や、専任教員の退職に伴い、この比率がますます減ってくると、十分

に責任を持った教育ができなくなる恐れがあることに注意が必要である。

3. これまでの課題

これまでの2年間の実践英語プログラムの運営においては、学生アンケートなどから、おもに次のような問題点が指摘されている。

3(1) レベル別のクラス編成はどのような効果があるのか

3(2) 日本人およびNSE授業のテキスト、授業がやや易しいのではないか、学期末の統一試験が易しすぎるのではないか

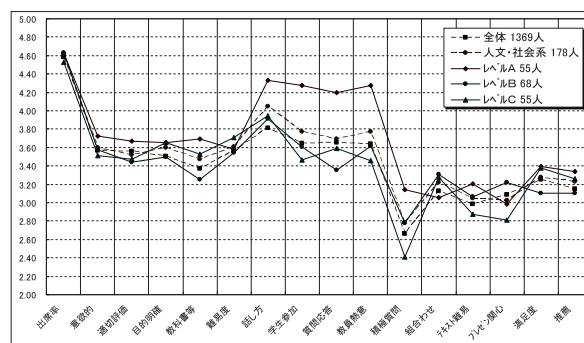
3(3) NSE専任教員の不在

以下では、18年前7月に本学(おもに日本人担当授業が対象)と業務委託先のベルリッツが実施した授業評価アンケート調査の結果を参照しながら、これらの問題点の分析とこれまでの改善点について述べることにする。

3(1) レベル別のクラス編成の効果について

18年7月のアンケートにおける、レベルごとの授業評価の集計では、学部、学系によって結果に多少のずれはあるものの、人文・社会系、法学系、理工学系、システムデザイン学部、健康福祉学部においては、AレベルとCレベルの学生の評価の違いがはっきりと出た。

参考までに人文・社会系の比較グラフを次に掲げる。

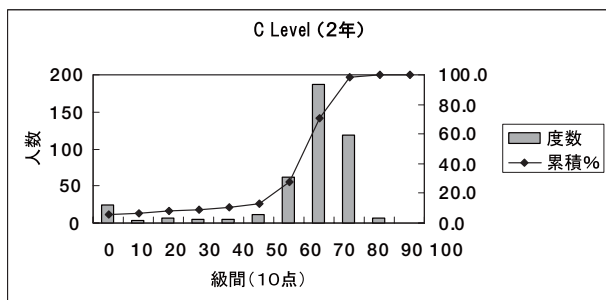
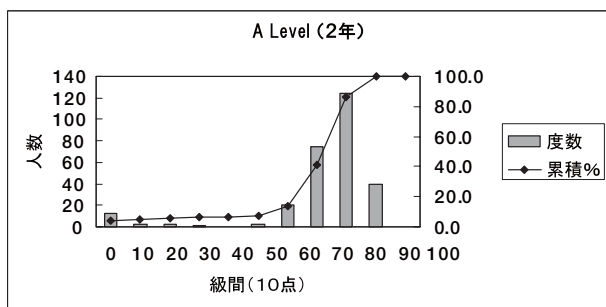


●: Aレベル、■: Bレベル、▲: Cレベル、-■-: 全体の平均

Aレベルにおいては、学生の積極性と教員の熱意が相乗効果をもたらし、各項目において高い評価に結びついていることがうかがわれる。これはまた、レベル別のク

ラス編成の効果とも言えるだろう。

またベルリッツのアンケートで、平成18年度前期のNSE担当授業の試験成績をレベル別に集計したもののうち、2年次生のAレベルとCレベルの成績分布は次のとおりである。



Aレベルにおいては80点台が一番大きな山になっているのに対して、Cレベルでは70点台が一番の山になっているが、同じ教材を使い、統一試験をおこなったことを考えれば、学力の差をかなり正確に反映しているものと見ることができるし、学力に応じた効果的な授業をおこなうためには、レベル別のクラス編成が有効であることの裏づけにもなっている。(成績が0点の者が少なからずいることは、おもに欠席回数が多かったためと思われる。)

3(2) 日本人およびNSE授業のテキストと授業、および学年末の統一試験について

日本人担当授業のテキストについて、易しすぎるという意見がある一方、全文の和訳がほしいという意見も複数見られ、学生の英語力のかんがりのばらつきを示すとともに、同じテキストを使った統一授業の難しさが示された。成績評価の公正さを保つためには統一授業と統一試験が必要であると考え、統一試験の改善と共に、授業のガイドラインを練り直し、それぞれのレベルに合った効果的な授業ができるよう、さらに工夫する必要がある。

NSE担当授業のテキストについては、17年度使用の市販テキストへの不満が講師、学生ともに多かったため、18年度にはベルリッツが大学向けに開発したテキストを利用したが、なお不十分であった。ベルリッツとの協議

の結果、本学の学生が求めているのは、単なる会話(Conversation)の力ではなく、専門課程に進んでも応用できるアカデミックな性格もそなえた英語(Academic Oral Communication)の能力であるとの観点から、それに基づいたテキストを改めて開発してもらった。19年度からは全面的に改定したテキストを使用しており、学生の要望にも応えられるものと期待している。

学期末統一試験の難易度については、毎年テキストが変わっていることもあり、なお、改善の余地がある。

3(3) NSE専任教員の不在について

首都大学東京の発足以来、英語教育におけるNSE専任教員の不在はもっとも大きな問題点であったが、幸い、5年任期によるプロジェクト型任用により、平成19年度4月にNSE専任教員を2人採用することができ、これによってなんとか英語教育の体制を整えることができた。

NSE専任教員の採用は、入試業務の改善や、外部への業務委託先との連携、3、4年次の英語カリキュラムの充実の点で大きな改善が期待されるものであり、採用にあたって尽力いただいた大学当局には、この場を借りて改めてお礼を述べておきたい。

4. 最後に

本学の英語教育はまだ試行錯誤がつづく段階であるが、最後に、以下の点を全学への要望として改めて記しておきたい。

・英語教育には全学の協力が必要

時間割の策定や統一試験の実施については全学の理解と協力が不可欠である。各学部、学系には英語が堪能な教員が多く揃っているので、専門課程でも語学の指導に努めていただくようお願いしたい。

・第一次中期計画の評価に向けて

英語教育の成果を判断するためには、必修となっている1、2年次の授業だけでなく、3年次、4年次での英語教育を含めた4年間全体の評価をもとにすべきである。

いずれ第一次中期計画の評価を迎えることになるが、第二次中期計画における英語教育の位置づけについては、外部への業務委託のあり方等を含め、全学の意見を踏まえて検討すべきと考えている。